

パレスチナ教育支援事業 中間活動報告会  
「Cover 2 Covert」

2012年4月26日

17:30~19:30

PB事務局内にて

一般参加者 11名ならびにPBスタッフ

17:30 第一部：ヘブロンぶらぶら 開始

・事業地について

- ヘブロン行政区ヘブロン市にオフィスを構える。ヘブロン行政区はパレスチナ自治区に14ある行政区のうちの一つで、最大の面積と最多人口55万人を有する。
- 今年3月に取られた一面雪景色の写真を紹介。7年ぶりの大雪とのこと。

・写真とともにヘブロン新市街（H1エリア：パレスチナ管轄下）の紹介

- 大通りには多くのオフィスビルが存在（スポーツセンター、ファッションブランド店、おもちゃ屋等）
  - 車（そのほとんどがタクシー）は重要な公共交通手段
  - ロバも馬もいる。
  - 若い女の子のファッション紹介
  - なんでもそろそろスーパーマーケット
- 物価は、現地のほうが安いのは野菜、乳製品、パン等日常よく使う食品、一方日本と大して変わらないのは加工品や輸入品。
- 道端の屋台でも販売される野菜やフルーツ、パン
  - 現地事務所でボランティアをしてくれている2名の女の子を動画つきで紹介

・写真とともにヘブロン旧市街（H2エリア：イスラエル管轄下）の紹介

- 新市街とは対照的に道は狭く暗い印象
  - 開店中の店はごくわずか
  - 旧市街にも小学校はあるが、子供たちはイスラエルが管轄するチェックポイント通過のため、IDカードを所持して登校
  - 小学校で教員を務める女性の話を紹介
- 女性によると、チェックポイントの周りではデモが行われることがあり、その影響で学

校が閉鎖されることもあるそう。また生徒数が少ないのも現実。

この女性の家族を例に、パレスチナの家族構造に言及。ヘブロンにおいては兄弟が多く、また歳が離れているのも当たり前となっており、それゆえ家族関係が複雑になることも。実際ヘブロン人口の半分以上が18歳以下。

兄弟が多いためか、周りの関心をひきつけようと自己主張が強くなる傾向がある。

#### ・子供たちの考える「モンダイ」とは

- 自由がない、社会が閉鎖的、学校・家庭内の暴力
- 不安定な社会、何が起こるか分からない現状を認識
- そのような現状認識の元でも大学で勉強をしたいことや、行ってみたい場所など様々な夢を語ってくれる。

### 質疑応答

#### 1、Q) ヘブロン人口の半分が18歳以下なのはなぜなのか

A) 紛争等人工的要因よりも自然的要因と考えられる。ここ近年、結婚年齢も上昇しているほか、一家族の子供の人数も数年前に比較すると減少しているが、依然地方部などを中心に人口は増え続けている。

#### 2、Q) H2エリアに住む子供たちの学校登校率はどれくらいなのか

A) 6～18歳の子供には義務教育が定められており、ほぼ全員が登校することとなっているが、近年中退・退学率が上昇している。それが勉強に集中できない現在の不安定な環境に起因するとも考えられる。

18:10 第一部終了

18:30 第二部：事業報告 開始

#### ・事業紹介

- 事業期間、事業地、カウンターパート、助成金元等

#### ・ワークショップ紹介

- 対象者：公共の場で子供たちに接する者（教員やソーシャルワーカー、NGO職員など）
- 内容：ドラマセラピー、ドラマエデュケーション

特徴—演劇空間、演劇的手法を利用。物語やイメージを多用し個性を尊重

目的—子供たちの心の安定やライフスタイルの向上

効果—自己表現能力、コミュニケーション能力、感情のコントロール能力の向上

### - 3月・4月のワークショップ

参加希望者は100名以上、その中から各月ごとに選出。両2か月の参加者情報

### - カリキュラム

#### - 参考にいくつかのワークショップの様子を紹介

✓ 「せんだみつおゲーム」のようなワークショップ

✓ 朝の出来事を一人一人発表するワークショップ

→意識して話すことの難しさを認識し、人前で自己表現する能力を促すことが目的

✓ 二人がペアとなり、一人が椅子の前に立って目を閉じもう一方が声をかけた後椅子にすわる、というワークショップ

→互いへの信頼・安心の度合いを認識することが目的

✓ 二人がペアとなり、一人が擬音で表現していることをもう一方がアラビア語で通訳する、というワークショップ

→前者は擬音で自分の思っていることをさらけ出し、後者は相手が何を言っているのか想像しながら自身の考えることを表現することが目的

✓ 児童保護、子供の権利のレクチャー

現状に沿ったデータを利用。参加者間でのディスカッションも実施

#### - ワorkshopの評価方法の紹介

#### - 参加者のワークショップへの評価

全体的には良好で、ワークショップを楽しんでいる様子。活発な質問もなされ、現場で実践したいとの声もある。

一方で改善すべき点や提案も（ワークショップの時間や回数の制限等）

### ・現ワークショップ終了後の展望

- 社会心理ケア効果の高いワークショップ（高度なドラマワーク）への移行

- 社会心理ケアネットワーク（プロフェッショナル）の強化

- 日本からの専門家派遣

### 質疑応答

#### 1、Q) 3・4月のワークショップ参加者のうち男性の割合が少ないのはなぜか

A) ワorkshop参加希望者を見ても女性の割合が高い。女性の割合が高いのは、女性が子供の権利やストレスケアといったトピックに関心強い傾向を反映した結果だと思われる。

それゆえ、いかにして男性教育者に関心を持たせるかが課題となる。

残業等の物理的制約な理由があるかというところでもない。というのも、学校の教員は午前中で授業が終了し午後はフリーとなるためだ。ただ、仕事の掛け持ちをしている教員は多く、その割合は男性の方が高いとも考えられるため、ワーク

ショップの時間帯を調整するのも一つの手段かもしれない。

2、O&S) パレスチナの不安定な現状、そしてなぜその緊張状態に至ったのかの説明があれば、事業の必要性をもっと伝えられたという感想。事務所での報告のみならず、もっと多くの人たちに伝えるための報告会・講演会の必要性が指摘された。

3、O) ヘブロンを事業地として選んだ理由、子供たちの置かれている現状の説明や現地の声をもっと聞いたかったという感想。

4、O) 子供たちが抱える「モンダイ」を知る中で、現在のパレスチナ社会と向き合うことの重要性、自分たちができることをしなければならないということを経験したという感想。是非現在の事業を継続してほしいとの激励。

5、O) データのみではなく、事業を通じて得た具体的なエピソードや体験談をもっと伝えてほしいとの感想。

6、Q) ワークショップで得た知識をいかにして実践に移すのか。それを評価する指標はあるのか。

A) ワークショップの2か月後に実践に移せるようカリキュラムが組まれている。

7、Q) ドラマセラピーの日本での認知度はどれくらいなのか。

A) 日本での認知度は低い。認知されていたとしても自己啓発系なものが多く、教育目的なものはごくわずかである。但し、池田小学校事件後に被害者のケアとしてドラマセラピーが取り入れられたという例もある。

当該分野ではイギリスが先駆的な役割を講じているが、その背景には文化的側面が影響している。ドラマセラピーでは参加者間の身体の接触もあるため、文化的配慮が必要となる。

8、Q) ドラマセラピーの子供たちへの効果とは。

A) 集中力やコミュニケーション能力、感情のコントロール能力の向上。不安定な社会で、家庭や学校での暴力にさらされる中、それを子供たちがまねていってしまうのを防ぐ目的がある。

9、Q) ドラマセラピーの効果は子供たちの年齢の違いにより左右されるのか。

A) 左右される。異なる年齢層の子供たちへの一律な効果を約束するものではない。特に思春期の子供たちの対応は難しく、セラピーの効果も生じさせるのも困難を伴

う。ただ、ワークショップ参加者には中学生を相手にする教育者が多い。

**10、Q) 教育者のワークショップへの参加方法は。**

A) 学校を通じて事業を紹介している。上からの許可を得ているということで教員が事業に参加しやすくなる配慮をしている。

**19:30 第二部終了**